

水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定に関する資料

フェリムゾン

1. 評価対象農薬の概要

1. 物質概要

化学名	(Z)-2'-メチルフェニル=4,6-ジメチルピリミジン-2-イルトラン				
分子式	C ₁₅ H ₁₈ N ₄	分子量	254.34	CAS NO.	89269-64-7
構造式					

2. 開発の経緯等

フェリムゾンは、菌類の菌糸生育及び孢子形成を阻害することにより殺菌活性を有する。本邦での初回登録は1991年である。

製剤は粉剤、水和剤が、適用作物は稲、芝（申請中）がある。

原体の国内生産量は、307.6t（17年度）、323.8t（18年度）、274.1t（19年度）であった。

年度は農薬年度（前年10月～当該年9月）、出典：農薬要覧-2008-（（社）日本植物防疫協会）

3. 各種物性

外観	白色粉末、無臭	土壌吸着係数	$K_{F_{OC}}^{ads} = 380 - 8,100(23)$
融点	173.9	オクタノール / 水分配係数	$\log Pow = 2.9(25)$
沸点	昇華するため測定不能	生物濃縮性	-
蒸気圧	4.12×10^{-6} Pa (20)	密度	0.66 g/cm^3 (20)
加水分解性	半減期 6.2時間 (pH1.2、25) 2.3日 (pH3、25) 12.5日 (pH5、25) 188日 (pH7、25) 8.6年 (pH9、25) 10ヶ月 (自然水、25)	水溶解度	$2.1 \times 10^5 \mu\text{g/L}$ (20)

水中光分解性	半減期（東京春季太陽光換算） <0.29 時間（緩衝液、pH9） <4.6 時間（滅菌自然水） （44W/m ² 、360-480nm）
--------	--

．水産動植物への毒性

1．魚類

（1）魚類急性毒性試験（コイ）

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96hLC₅₀ = 20,000 μg/L であった。

表1 コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体						
供試生物	コイ (<i>Cyprinus carpio</i>) 10尾/群						
暴露方法	止水式						
暴露期間	96h						
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	14,000	18,000	24,000	31,000	40,000	
実測濃度 (μg/L) (暴露開始時-暴露 終了時)	0	13,900 -13,300	18,200 -17,600	23,900 -23,300	30,700 -30,400	40,200 -39,800	
死亡数/供試生物数 (96hr 後; 尾)	0/10	1/10	2/10	9/10	10/10	10/10	
助剤	なし						
LC ₅₀ (μg/L)	20,000 (95%信頼限界 17,000-22,000)(設定濃度(有効成分換算 値)に基づく)						

2．甲殻類

（1）ミジンコ類急性遊泳阻害試験（オオミジンコ）

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48hEC₅₀ = 6,200 μg/L であった。

表2 オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体							
供試生物	オオミジンコ (<i>Daphnia magna</i>) 20頭/群							
暴露方法	止水式							
暴露期間	48h							
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	3,500	4,600	5,900	7,700	10,000	13,000	
実測濃度 (μg/L) (暴露開始時-暴露 終了時)	0	3,300 -3,300	4,400 -4,300	5,700 -5,600	7,300 -7,200	9,500 -9,400	12,000 -12,000	
遊泳阻害数/供試生	0/20	3/20	5/20	10/20	13/20	17/20	18/20	

物数(48hr 後; 頭)							
助剤	なし						
EC ₅₀ (μg/L)	6,200 (95%信頼限界 5,300-7,100) (設定濃度(有効成分換算値)に基づく)						

3. 藻類

(1) 藻類生長阻害試験

Pseudokirchneriella subcapitata を用いた藻類生長阻害試験が実施され、72hErC₅₀ > 7,500 μg/Lであった。

表3 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体						
供試生物	<i>Pseudokirchneriella subcapitata</i> 初期生物量 1 × 10 ⁴ cells/mL						
暴露方法	振とう培養						
暴露期間	96 h						
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	630	1,300	2,500	5,000	10,000	
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値 0-96h)	0	460	1,000	1,800	3,600	7,500	
72hr 後生物量 (× 10 ⁴ cells/mL)	63	63	51	50	15	9.3	
0-72hr 生長阻害 率 (%)		0.1	5.0	5.3	35.2	46.9	
助剤	なし						
ErC ₅₀ (μg/L)	>7,500 (0-72h) (実測濃度に基づく)						
NOECr (μg/L)	1,800 (0-72h) (実測濃度に基づく)						

環境中予測濃度（PEC）

1. 製剤の種類及び適用農作物等

本農薬の製剤として粉剤、水和剤があり、稲、芝に適用がある。

2. PECの算出

(1) 水田使用時の予測濃度

第1段階における予測濃度を、PECが最も高くなる稲への粉剤における以下の使用方法の場合について、以下のパラメーターを用いて算出する。

表4 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター（水田使用時第1段階）

PEC算出に関する使用方法及びパラメーター	
剤型	2%粉剤
地上防除/航空防除	地上
適用作物	稲
施用法	茎葉散布
ドリフト量	算出
農薬散布量	4,000g/10a
I : 単回の農薬散布量（有効成分 g/ha）	800g/ha
f_p : 施用法による農薬流出補正係数（-）	0.5
T_e : 毒性試験期間	2日

これらのパラメーターより水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

水田 PEC_{Tier1} による算出結果	6.0 $\mu\text{g/L}$
--------------------------	---------------------

(2) 非水田使用時の予測濃度

第1段階における予測濃度を、PECが最も高くなる芝への水和剤における以下の使用方法の場合について、以下のパラメーターを用いて地表流出によるPECを算出する。

表5 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター（非水田使用第1段階）

PEC算出に関する使用方法		各パラメーターの値	
剤型	30%水和剤	I : 単回の農薬散布量（有効成分 g/ha）	3,000
農薬散布液量	1,000L/10a (1L/m ²)	D_{river} : 河川ドリフト率（%）	0.1
希釈倍数	1,000倍	Z_{river} : 1日河川ドリフト面積（ha/day）	0.12
地上防除/航空防除	地上	N_{drift} : ドリフト寄与日数（day）	2
適用作物	芝	R_u : 畑地からの農薬流出率（%）	0.02
施用法	散布	A_u : 農薬散布面積（ha）	37.5
		f_u : 施用法による農薬流出係数（-）	1

これらのパラメーターより非水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

非水田 PEC_{Tier1} による算出結果	0.012 $\mu\text{g/L}$
---------------------------	-----------------------

(3) 環境中予測濃度

(1)、(2)より、最も値の大きい水田使用時の PEC 算出結果をもって、環境中予測濃度は、水田 $PEC_{Tier1} = 6.0$ ($\mu\text{g/L}$)となる。

. 総合評価

(1) 登録保留基準値案

各生物種の LC_{50} 、 EC_{50} は以下のとおりであった。

魚類（コイ急性毒性）	$96hLC_{50} =$	20,000	$\mu g/L$
甲殻類（オオミジンコ急性遊泳阻害）	$48hEC_{50} =$	6,200	$\mu g/L$
藻類（ <i>Pseudokirchneriella subcapitata</i> 生長阻害）	$72hErC_{50} >$	7,500	$\mu g/L$

これらから、

魚類急性影響濃度	$AECf = LC_{50}/10 =$	2,000	$\mu g/L$
甲殻類急性影響濃度	$AECd = EC_{50}/10 =$	620	$\mu g/L$
藻類急性影響濃度	$AECa = EC_{50} >$	7,500	$\mu g/L$

よって、これらのうち最小の AECd より、登録保留基準値 = 620 ($\mu g/L$) とする。

(2) リスク評価

環境中予測濃度は、水田 $PEC_{Tier1} = 6.0$ ($\mu g/L$) であり、登録保留基準値 620 ($\mu g/L$) を下回っている。

< 検討経緯 >

2009年10月9日 平成21年度第4回水産動植物登録保留基準設定検討会